

早稲田大学大学院日本語教育研究科

修士論文概要書

論文題目

言語教育観の意識化と自己変容
—過去・現在・未来を結ぶ自分誌実践の試み—

松本 裕典

2013年3月

0. 本論文について

本論文の目的は、日本語教育学の確立が叫ばれる 21 世紀において、自らの言語教育観の更新プロセスを意識化し、これからの日本語教育にかかわる一人の言語教育実践者としての自らの立場の形成を目指すことである。本論文は、本文 5 章構成であり、全 85 ページとなっている。以下に、各章の概要をまとめる。

1. なぜ自分誌を書くのか

本論文では、自らの言語教育観の更新プロセスを意識化するために「自己エスノグラフィー (Auto-ethnography)」(Hayano 1979) という手法を採用し、自分誌を執筆している。まず、第 1 章では、先行研究をたどりながら、なぜ自らの言語教育観の更新プロセスを意識化し、自らの立場の形成を目指すことが必要なのかについて述べる。そして、そのためになぜ自分誌を書くのかを説明する。

日本語教育学の確立のために「自分の立場を形成しうる日本語教師の誕生」(細川 2007 : 87) が期待されており、各々の実践の開示が広く行われている。しかし、「自分の立場を形成」するプロセスについてはあまり開示されていない。「自分の立場」を支える基盤となるのは、自分自身の言語教育観である。ところが、「通常自分の言語教育観」は「無自覚に出来上がっている」(岡崎 1997 : 17-18)。「無自覚に出来上がっている」言語教育観を自覚化あるいは意識化しないことには、「自分の立場を形成」することも困難であろう。

さらに、「自分の立場を形成する日本語教師」(細川 2007 : 87) が、「自らの言語観や教育観をその都度問い直し、その内省と他者とのインターアクションによってその立場を更新しつづける」(p. 87) 者であり、「絶え間ない他者とのインターアクション」(p. 87) のために、実践を開示していく必要があるならば、実践を開示するという所作のなかには、言語教育観の積極的な開示が含まれるはずである。このような問題意識のもと、筆者自身の「自分の立場を形成」するプロセスに着目した。

そもそもこの問題意識を抱くに至ったのも、この問題が、筆者自身にとっても例外ではなく、自らの言語教育観というものに無自覚であったからだった。ところが、「にほんご わせだの森」(以下、「わせだの森」)¹という筆者がかかわった一つの教室実践のなかで自ら

¹ 「わせだの森」は、筆者が所属する大学院の授業（教育実習）の一環として実施する地域日本語教室であり、「地域」と「日本語教育」をめぐって、院生が自ら考え自ら実践を組み立てていくことを課題」（池上 2009 : 165）とする実践の場である。筆者が行った実践の概要は、松本、角浜（2012）を参照されたい。

の言語教育観を意識する感覚が芽生えたことをきっかけとして、それを記述してみたいという欲求に駆られたのである。そのような当事者として「自己の文化の中の自分自身の経験を対象化して、自己について再帰的にふり返り、自己—他者の相互行為を深く理解しようとする」(エリス, ボクナー 2006 : 137) 手法に自己エスノグラフィーというものがある。日本においても、特に 2000 年代後半以降、自己エスノグラフィーの一種である自分誌を取り入れた言語学習・言語教育実践が見られ、実践者自身による自分誌の試みも出てきている。たとえば、「日本語教師としての私自身の自分誌から、(中略) 教師の成長と教育観の関係について考察」した佐藤 (2012 : 203) などがある。

本論文では、自らが書いた自分誌を分析対象として切り取ってしまうのではなく、実践そのものとして位置付けている。すなわち、自分誌を執筆すること自体を分析と考察を含んだものと捉える自分誌実践の試みなのである。ゆえに、以下に続く第 2 章から第 4 章までの本文は、筆者自身が「僕」という一人称で書いた自分誌をそのままの形で提示する。自分誌は「僕のなかにある日本語教育」をテーマとして、筆者と日本語教育との出逢いの部分 (2007 年) から執筆時現在 (2012 年) に至るまでの約 6 年間を詳細に記述した。

2. 日本語教育との出逢い——「外国人」に「日本語」を教えるシゴト？

第 2 章では、筆者と日本語教育との出逢いの部分から日本語教師を生涯の仕事として考え始めるところまでを振り返って記述している。筆者と日本語教育との出逢いは、大学に入学した 2007 年 4 月のことである。筆者は、山梨県都留市にある都留文科大学に 4 年間通ったのだが、第 2 章で記述するエピソードは時期で言えば、主に大学 1 年生から 2 年生 (2007 年から 2008 年) にかけての出来事が中心である。

大学の入学式で配られた学生便覧に「日本語教員養成課程」という副専攻にあたるコースの紹介が掲載されており、そこで初めて、「外国人に日本語を教えるシゴト」である日本語教師という職業の存在を知った。そういうコースがあるのなら履修してみようと思い、1 年生から取れるいくつかの科目を履修登録した。その時は、日本語教育に興味を持ったというよりは、自分で学費を稼いで払い、生活することにしていただけのため、単に学費がもったいないというだけの理由だった。

その頃の筆者のもっぱらの関心は、世界を滅ぼすことだった。筆者は、人間が嫌いで、自分一人だけの世界に閉じこもって暮らしていた。苦難ばかりの人生に絶望していたのである。ある意味でどうにもならない事件によって心を閉ざしてしまい、人間が嫌いになっ

てしまった。それからというものの、ひととかかわり生きていくよりも、一人で生きていくことを選んできたのである。他人を心のなかから排斥することで傷付くことから目をそむけ、人間との接触や交流を嫌った。「僕」（自己）を胸のなかに深く押し込めることで、平静を装い、本当の気持ちを誰にも悟られないようにしていた。

しかし、大学で気の置けない仲間たちと出逢い、彼らとの交流のなかで、鬱陶としていた感情がほだされて、ひととかかわることへと心を開いていった。その一方で、日本語教育の授業を受けるうちに、これまで自分が何気なく話していた「日本語」というものを外から分解して眺めるという作業が楽しいと感じるようになっていた。だんだんと日本語教育にも興味が出てきたのである。

これらのことを振り返って思うことは、どちらもこれまで自分が持っていたものの見方の尺度が変わったということである。世界が違って見えたという経験が、自分のなかにあったもやもやとした感情を引き剥がし、惹きつけていった。日本語教育との出逢いによって変わり始める自分に戸惑いと喜びを感じていた。自覚こそしていなかったが、筆者の世界観は緩やかに更新され始めていたのである。

3. 日本語教育とのかかわり——実践する、考える、実践する

第3章では、日本語教師を生涯の仕事として考え始めた筆者が、大学内外で積極的にひととかかわっていく様子を振り返って記述している。ひととかかわることが嫌いだった筆者が、日本語教育を通してひととのやりとりを重ね、確実に変わっていった頃である。第3章で記述するエピソードは時期で言えば、主に大学3年生から4年生(2009年から2010年)にかけての出来事が中心である。

日本語教師になる覚悟を固めつつあった筆者は、大学院に進むことを考えていた。大学でも日本語教育の基礎はいくらか学んできたけれど、職業にするためには、もっと専門的な知識が要ると考えたからである。そのために、自分で自らの未来像を描き、先生の助言をもらいながら、行動を起こしていった。大学内において、日本語教育が周辺化されていることに気が付き、それをなんとかするために、自分で在校生を集めて日本語教育についての勉強会を立ち上げた。勉強会から、留学生との交流やひととひとの輪も広がっていき、日本語教育の多様性にも触れることができた。

一方で、筆者の出身地である浜松市のことに関してもいろいろな気付きがあった。実際に浜松市で実践を続けてきた方々の話を伺いながら、「多文化共生」という概念に関心を抱

いていった。それを卒業論文のテーマと決め、大学院にもこのテーマで進学しようと考えた。また、オーストラリアに行く機会に恵まれ、ことばの通じない環境のなかで必死にやりとりをしようとする言語学習者としての経験もした。さらに、大学1年生の時からずっと続けているアルバイトで、やりとりのなかで感覚的に身体的に仕事を覚えていくことにも、似たような学びがあるのではないかという感覚も抱いていたことに気が付いた。

最終的に筆者は、卒業論文を書くなかで、ゼミの仲間たちとの議論がとても楽しいと感じ、みんなで作り上げているような感覚を得た。こういう議論がもっとしたい。議論のなかに気付きがあり、議論によって培われていく自分の世界観や思想といったものが確かに感じ取れた。本当は他者とのやりとりに飢えていたのかもしれない。そうした経験や想いを抱えながら、大学を卒業し、大学院に進学していくこととなった。

この時期でも、筆者は、多様な価値観を持つ他者とのやりとりのなかで、世界が違って見えてくる経験を重ねていた。その結果として、もう人間を嫌い、自分のなかだけに閉じこもっている筆者はいなかった。筆者の世界は外へと開かれていき、その世界観は、ひととのやりとりのなかで繰り返し更新され続けていたのである。

4. 日本語教育との闘い——やりとりのなかで考えを更新していく所作

第4章では、大学院に入学してからの出来事を中心に、引き続き自分誌というスタイルで過去を振り返って記述している。筆者は、大学卒業後すぐに早稲田大学大学院日本語教育研究科に進学した。第4章で記述するエピソードは、この時期の修士1年生から2年生（2011年から2012年）にかけての出来事が中心である。

大学を卒業した筆者は、東京へと引っ越してきていた。大学でのさまざまな経験や想いを胸に、大学院での新しい出逢いとかわりに期待していた。大学院の授業には、日本語教育の理論を学ぶ科目と実際に実践をしながら日本語教師の役割について考えていく教育実習の科目とゼミにあたる演習科目の三種類があり、それぞれを履修しながら、ここでもまたさまざまな経験をしていくことになった。早稲田の大学院では、大学院生の研究テーマや言語教育観に「なぜ」と問いかけることが常となっており、どの科目でも自分はなぜこの研究がしたいのかを考えさせられた。しかし、筆者は議論して闘いながら考える風土がすぐに好きになった。大学院の授業になじんでいくにつれて、教師の手のなかに答えがあって、それを求めていくような授業や教育観に違和感を示すようになっていった。

そんな筆者にとって転機となったのが、「わせだの森」の実践だった。筆者を含めた 7

名の大学院生の協働的な話し合いによって、活動の目的や内容、対象といった事柄のすべてを組み立てていく「わせだの森」の実践のなかで、筆者は、これまでに感じた以上の葛藤や気づきにぶち当たった。まったく異なった複数の言語教育観のぶつかりを体感したのである。自分が発したことばを受けとめてくれる他者がいて、自分自身もまた他者のことばを受けとめる。そうした濃縮されたやりとりの積み重ねによって、筆者の世界観は飛躍的に更新されていったのである。

5. 「僕」にとって「日本語教育」とは何か——自分誌を振り返って

第5章では、第2章から第4章までに描いた自分誌を振り返って解釈を加え、本論文における主張を結論として述べている。まず、自分誌のなかから見えてきたもの、すなわち、「僕」にとって「日本語教育」とは何か、という問いに答える。続いて、本論文全体を通しての自分誌実践の意味付けを行う。最後に、本論文が実践者としての立場の形成という一つの出発点であるという点を認識した上で、今後の課題と展望を述べる。

自分誌実践から見えてきた「僕」(筆者)にとっての「日本語教育」とは、ひとと向き合い、やりとりを重ねるなかで自らの考えを更新し続けていく所作であった。このことは筆者のなかになんとなくとして「無自覚に出来上がって」(岡崎 1997: 18) たものであるが、自ら書いた自分誌を、自ら読み返し、書き直すことによって意識化され、明確に立ち現われてきた筆者の「日本語教育」観(言語教育観)である。「日本語教育」観を意識化するということは、このような言語教育観に立って具体的な実践を構想していきたいという言語教育実践者としての立場の形成でもある。ただし、この「日本語教育」観は、ここまで更新してきたように、これからも常に更新しつづけていくものであり、決して固定的なものではない。

筆者自身の自分誌実践から言語教育観の更新プロセスを描き出した本論文からは、言語教育実践者自身の言語教育観を明らかにして、実践を実施していくことが重要であるという主張が示される。言語教育観を明らかにする際の手段として自分誌実践という行為が有効であることが示唆された。本論文で行った自分誌実践では、筆者の人生を過去にさかのぼり、日本語教育との出逢いの部分からさまざまな経験を交えて現在までのエピソードを詳細に記述している。そのことによって、たった一つの教室実践の振り返りからは見えてきにくかった、筆者自身の言語教育観の意識化のプロセスが明らかとなった。ここでの立場の形成は、筆者の未来の実践へと続いていく。言語教育観を意識化するには、自分自

身の人生を長期的な視野を持って遠視眼的に実践を含んだ自己変容の物語として捉える必要がある。すなわち、長いスパンでのリフレクションが重要なのである。

文献

- 池上摩希子 (2009). 「教室」の解体が創出するもの——「にほんご わせだの森」の実践から考える対話の可能性. 小林ミナ, 衣川隆生 (編) 『教室』(日本語教育の過去・現在・未来 3) (pp. 161-179) 凡人社.
- エリス, C., ボクナー, A. P. (2006). 藤原顕 (訳). 自己エスノグラフィー・個人的語り・再帰性——研究対象としての研究者. 大谷尚, 伊藤勇 (編) 『質的研究資料の収集と解釈』(質的研究ハンドブック 3) (pp. 129-164) 北大路書房. (Ellis, C. & Bochner, A. P. (2000). Autoethnography, personal narrative, reflexivity: Researcher as Subject. In N. K. Denzin & Y. S. Lincoln (Eds.). *Handbook of qualitative research*. (2nd ed., pp. 733-768). Thousand Oaks: Sage.).
- 岡崎敏雄 (1997). 日本語教育実習の理論的枠組み. 岡崎敏雄, 岡崎眸 『日本語教育の実習——理論と実践』(pp. 8-36) アルク.
- 佐藤正則 (2012). 「私」という日本語教師の変貌を意識化する——自分誌による教育実践の編み直し 『国際研究集会「私はどのような教育実践をめざすのか——言語教育とアイデンティティ」プロシーディング』 202-210.
- 細川英雄 (2007). 日本語教育学のめざすもの——言語活動環境設計論による教育パラダイム転換とその意味 『日本語教育』 132, 79-88.
- 松本裕典, 角浜ひとみ (2012). 2012 年度春学期「にほんご わせだの森」実践報告 『地域日本語教育実践研究』 7, 3-10. <http://www.gsjal.jp/ikegami/report07.html>
- Hayano, D. M. (1979). Auto-ethnography: Paradigms, problems, and prospects. *Human Organization*, 38(1), 99-104.